

主 題：主の晩餐①

聖書箇所：コリント人への手紙第一 11章17-24節

コリント教会にはいろいろな問題が存在していました。前回、私たちは「かぶり物」について、彼らの間違いを指摘して矯正したパウロの教えを学んで来ました。今日、私たちが見ようとしている17節からは、また別の問題についてパウロは同じように問題を指摘してそれを矯正しようとしています。どんな問題だったのか？それは「主の晩餐」について、言い方を変えるなら「聖餐式」についてです。彼らはこのことにおいても間違っていたのです。それでパウロは彼らを矯正しようとするのです。

本来なら、主の栄光を現し、兄弟姉妹たちの愛によってそれぞれの信仰が励まされる主の晩餐の時間が、主の栄光を汚し、兄弟姉妹たちを傷つけるそんな時間となっていたのです。そこでパウロはコリント教会の人たちに「主の晩餐」についての主のみこころを教えようとするのです。

17節のみことばを見てください。「ところで、聞いていただくことがあります。」ということばで始まっています。日本語の訳者なこのように易しく書いていますが、「聞いていただくこと」とは「しなければならぬことを知らせる、指示を与える、命令する」という意味を持っています。ですから、パウロは彼らの間違いを知っていたので、「あなたがたにあなたがたが今すぐしなければならぬことを知らせる」と、こうしてこのメッセージをスタートするのです。

★主の晩餐について

A. 愛餐でない愛餐 17-22節

1. 害となっていた集まり 17節

パウロはこの教会の問題を知っていました。だから、「私はあなたがたをほめません。」と言っています。その理由がその後に書かれています。「あなたがたの集まりが益にならないで、かえって害になっているからです。」と。益にならないで却って害をもたらす集まりだと言います。そのような状態になっていたことを知っていたパウロは「私はあなたがたをほめません。」と言うのです。この後、その理由を、その問題を詳細に記しています。順に見ていきます。

2. 分裂が存在した集まり 18-22節

少なくとも、私たちが言えることはこの教会で信仰者が集まったときに、この集まりの中に分裂が存在していたということです。一つになっていなかったのです。

1) 分裂の真相 18節

18節「まず第一に、あなたがたが教会の集まりをするとき、」と、何を言っているのか？彼らが神の民として集まる時です。もちろん、その中には自分は神の民だと確信をもっている者もいましたが、そうでない者たちもいたのです。自称「クリスチャン、救われている」と言う者たちもいっしょに集まる時をパウロは言っています。そのときにその集まりの中に分裂があると言います。「あなたがたの間には分裂があると聞いています。ある程度は、それを信じます。」とパウロは言っています。

結論から言うと、この教会にあった分裂とは「貧しい者たちと豊かな者たち」の分派、二つのグループです。この当時、聖餐式が為される時には食事もともに行われました。この二つはセットになっていました。教会が誕生したときから、まさに、彼らは主の十字架を覚えともに食事をしていたのです。使徒の働き2章、ペテロのメッセージによって3000人の人たちが救いに与った後、最初の集まりがここに誕生するのです。教会が誕生していくのです。2:46には「そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、」とあります。彼らは食事をともにしていたのです。この食事のことを愛餐と呼びました。というのは、兄弟姉妹たちがともに集まって食事をするとき、その集まりの中心はキリストからいただいた愛だからです。キリストによって愛され、キリストを愛する者たちがともに集まったとき、兄弟姉妹が同じように愛し合っているなら、当然、それはただの食事会ではなく「愛餐会」でした。

この当時、今のポットラックのように、それぞれが食事を持って来るのです。物質的に豊かな人は食事をたっぷり持って来ました。しかし、貧しい人たちの中には何も持って来ることが出来ない人もいたのです。それが問題だったのではなく、豊かな者たちは自分たちが持って来た豊富な食糧を食べ物が無い貧しい人たちに分け与えるのではなく、自分たちで食事をしていたこと、それが問題だったのです。ですから、愛餐ではなくただの飲食だったのです。愛が欠けたただの食事会に過ぎなかったのです。そこが問題だとパウロは指摘するのです。

2) 分裂の効果 19節

パウロはこの現実を踏まえて、実は、そのことは悪いことではないと言います。19節「というのは、あなたがたの中でほんとうの信者が明らかにされるためには、分派が起こるのもやむをえないからです。」と。実は、この分裂によってだれが本当の信者なのか？本当に救われている人がだれなのか？そのことが明らかにされると言うのです。まさに、分裂の効果のようなことをパウロは教えているのです。「ほんとうの信者」とは「本物と証明された」という意味で、あるテストを通して証明されたのです。確かに、この人は救いに与っていると、分裂はそのことが明らかになる機会だということです。

ここに「分派が起こるのもやむをえないからです。」とありますが、これは「何かが必要である」という意味をもったことばが使われています。ですから、パウロが言うことは、こういう分裂は大変悲しいことだが、これがあることによって、本当の信者がだれかを見分けることができるから、まさに、必要なことだとそのように教えるのです。

ちょっと考えてしまいます。この教会の中に存在する分裂によって本当の信者がだれなのか？それが明らかになるとはいったいどういうことでしょうか？何によって明らかになるのでしょうか？

*** 分裂によって本当の信者かどうかが明らかにされる！ 偽りの信者は…**

(1) **神への恐れがない** : 本当の救いに与っている者の特徴の一つは「神に対する恐れ」です。ということは、みことばは私たちに「神への恐れがない人たちは救いに与っていない人」であることを教えています。たとえば、ローマ3：18には「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」と詩篇のみことばを引用してそのように語っています。詩篇36：1「罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない。」と。救いに与っていない人たちは神を恐れていないのです。

では、恐れるものを持っていない人たちはどのような生き方をするのか？説明するまでもありません。その人たちは自分の肉の欲することを行います。恐ろしい存在がいなければ抑止力が外れて自分のやりたいことをします。ですから、みことばが教えることは、神に対する恐れがない人たち、自分たちの欲のままに歩んでいる人たち、もちろん、クリスチャンでもそういうことがあります。ここで言っているのはそのように歩み続けている人たちです。

では、救われている人は「神を恐れる」者です。彼らはどのように生きるのか？神を恐れるゆえに、神の前に正しいことを行っていこうとします。失敗をしても神に正しいことをしようとして。だから、クリスチャンの生活は「告白」の生活なのです。悲しいことに、私たちの中でだれ一人として信仰歴が何年であろうと、罪を犯さない人はどこにもいません。私たちは罪が赦された罪人なのです。救いに与っていない人は罪が赦されていない罪人なのです。どちらも罪人です。残念ながら、私たちは罪をもっています。

でも、救いに与った者たちは神を恐れるゆえに、神が悲しまれることはしたくないから、罪を犯したならその罪を悔い改めて神の前に告白しそれを洗い清めていただくとうとします。そのようにして私たちは生きていくのです。ですから、神を恐れている人は失敗をしながらでも神の前に喜ばれること、神の前に正しいことを行い続けていこうとするし、神が憎まれる罪から離れて行こうとします。

ですから、パウロが救いに与っている者と与っていない者の二者をこのように表現しています。ローマ2：7に「忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、」と書かれています。よく見てください。この箇所はもしあなたが「忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと不滅のものを求める」なら、神はあなたに「永遠のいのちを与え」てくれると言っているではありません。なぜなら、そのように行える人はどこにもいないからです。では、何を言っているのか？「永遠のいのちをいただいた者たち」はこのように生きると言うのです。「忍耐をもって善を行い」続けようとするし、「栄光と誉れと不滅のものを求め」る。それは永遠のいのちをいただいていることの証拠だと言います。次の8節を見てください。「党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。」と、神の怒りが下るのはどのような人にですか？「党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者」たちだと言います。

ですから、このように二種類の人間がいるのです。神の前に不義を行い神に逆らい続けている人たちと、赦されたことを感謝して神に喜ばれること、神の前に正しいことを行い続けていこうとする人たちと、何が違うのか？永遠のいのちをいただいているのかいないのか、救いに与っているのか与っていないのかです。ですから、このようにいろいろなことを通して、その人が本当に神を恐れる人かどうかが明らかにされるのです。うわべだけを見ては分からないけれど、時間をいっしょに過ごすことによってその人が本当にどんなことを願いながら歩んでいるのか、そのことを知ることになります。

2) 神と兄弟姉妹への愛が欠ける

二つ目は、本当の信者かどうかというのはその人のうちに「神と兄弟姉妹たちへの愛」があるかどうかによって分かるということです。今から見ていきますが、このコリント教会で分裂を起こしていた人たちはすべてなのか一部なのか、それは分かりません。しかし、少なくとも教会の中に存在した人たち

の中には神に対する愛も兄弟姉妹たちに対する愛も欠けている人たちがいたということです。ローマ 1 : 31、32 「:31 わきまのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。:32 彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行う者に心から同意しているのです。」とあります。救いに与っていない人たちのことです。

3 1 節にある二つのことばに注目してください。それは「情け知らずの者」と「慈愛のない者」です。「情け知らずの者」とは「思いやりがない」ということです。このことばは「親しい仲間や家族への愛や慈しみに欠けている」という意味をもっています。自分の親しい者や愛する者へ愛が示されないのです。彼らに対して慈しみが示されない。そういう人のことです。ですから、英語の聖書にはこのことばは「無情、冷酷、愛情がない、優しくない」という意味をもったことばに訳されています。

先に話したように、この教会の中で裕福な者たちは自分たちで食事を持って来て、何も食べるものがない人たちに対して全く思いやりがないのです。それに対してみことばはその人たちは救いを知らない者たちであると言います。Iヨハネ4 : 19に「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」と、皆さんよくご存じのみことばです。つまり、私たちが兄弟姉妹と愛し合うのはキリストの愛をいただいたから、その愛によって互いを愛する者へと変えられたからです。同じIヨハネ4 : 8には「愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。」とあります。だから、思いやりの気持ちを持つとか愛を示すということは、救いに与った私たちに神が備えてくださったものです。

もう一つのことば「慈愛のない者」とは「あわれみのない」人のことです。同じIヨハネ3 : 17に「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。」とあります。ですから、教会で愛餐のために人々が集まったときに、パウロが教えたことは、そのときにひとり一人の心の中にあるものが明らかになるということです。自分たちはおいしいものをたくさん食べているがそうでない人がいる。この現状の中でそれぞれが神の前に本当に救いに与っているのかどうか、そのことを知るようになるということです。もし、救いに与っているなら、当然、彼らに対してあわれみの心を示すだろうし、彼らに対して神の愛を示して彼らのために何かをしようとするだろうし、少なくとも、彼らに思いやりの気持ちをもって接するでしょう。だから、本当に救いに与っているのか？そのことを知る機会だとパウロは言うのです。

信仰者は何を語るかではなくどのように生きるかです。私たちは学びをするといろいろな質問に対して答えをすることができます。なぜなら、答えを何度も聞いているからです。問題は、私たちがどのように生きるかをいうことであって、パウロが問うていることはそうです。キリストの愛をいただいている者なら、その愛を分かち合っているか？それに基づいて行動しているのかどうか？です。

また、「困難や迫害」によっても明らかになります。イエスが四つの種まきのことを話されたことを思い出されますか？道端に蒔かれたとか岩地に蒔かれたとか茨の中に蒔かれたとか良い地に蒔かれたと…。その中でこんなことを言われています。マタイ13 : 20-21 「:20 また岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。:21 しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」、しばらくの間はクリスチャンらしく振舞っているけれど、みことばのために困難や迫害が起こって来ると、すぐにつまずいてしまうのです。教会の集まりにいるけれど、何かの問題が生じるとか迫害が出て来るといなくなってしまう。

2 2 節「また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。」、教会に集まってみことばを学んでいるかもしれない、いろいろな活動に参加しているかもしれない、でも、その人の関心は神ではなくこの世のことなのです。ですから、世の中が益々魅力的になるほどにそちらの方に引かれて行ってしまうのです。

その人のうちに福音の種がしっかり根を張って芽を出しているのか？それはいろいろな困難や迫害を経験するときに明らかになるということです。神はいろいろなことを使われて信仰が本物かどうかをひとり一人が吟味する機会をくださっているのです。だから、私たちがいつも考えるべきことは、もちろん、救いの確信がある人がその確信を疑うということではありません。少なくとも一回は自分に「私は今日死んでも間違いなく主イエス・キリストの許にいくのかどうか？」と問い掛けてみる必要があります。もしかすると、自分は救われていると思っ込んでいただけかもしれませんが。コリント教会にいた非常に豊かな人たちはそうであったのです。教会の中には本物の信者とそうでない信者が存在するのです。悲しいですが現実です。

3) 分裂の問題 20-22 節

パウロは実際にこの教会に分裂があることを知った上で、それも実は、そのことを通して本当に救われているかどうか明らかになる機会だと言った後で、実際の教会の中の問題点について20-22 節で教えます。

(1) 誤った目的 20-22 a 節

「:20 しかし、そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。:21 食事のとき、めいめい我先にと自分の食事を済ませるので、空腹な者もおれば、酔っている者もいるというしまつです。:22 飲食のためなら、自分の家があるでしょう。…」とここまでにします。彼らが集まったときに晩餐、夕食をともにしました。でも、この晩餐は「主の晩餐」ではなかったのです。彼らはただの普通の食事をしていたのです。だから、20節に「あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。」とある通り、自分たちの晩餐を食べているに過ぎないと言うのです。

つまり、その食事に主がいないということです。本来なら、救いに与った者たちがともに集まるのなら、自分たちの栄光の主を覚えて集まるはずなのに、そのことを覚えることもないし、その主に感謝をささげるのでもないし、その方を称えるのでもなかった。ただ自分たちが集まりたいから集まっていたのです。そのような集まりだとパウロは言うのです。ですから、この集まりは大変利己的なものでした。それゆえに、このような「豊かなグループ」と「豊かでないグループ」の二つが存在するようになったのです。

その食事の様子が21節に書かれています。「めいめい我先にと自分の食事を済ませるので、…」と、つまり、豊かな人たちは食事を持って来ているので、他の人たちのことは全然考えないで食べるだけ食べて自分たちの食事を済ませてしまうのです。そんな状態だとパウロは教えてくれるのです。自分の食事を済ませることしか考えていないのです。この食事をだれかに分け与えようなどとは考えてもいないのです。

だから、その結果見てください。「…空腹な者もおれば、酔っている者もいるというしまつです。」と悲しいことです。主の晩餐なら主がその中心であるはずですが、ここでは食事を食べるのでできない人たち、ある人たちにとってはこの愛餐に出て来てそこで食事に与ることは、その人の生活の中で一番栄養のあるものかもしれません。彼らは持って来ることができないのです。でも、教会の中のグループのある人たちは、その人たちのことを全く顧みることなく自分たちだけで食事を終わってしまうのです。あるグループは非常な満腹感を味わっているけれど、片やこちらのグループは食べ物がなく空腹感をいだいていると言うのです。

それだけでも非難されるところですが、さらに「酔っている者もいる」と書かれています。この人たちは当然食事をした後で、今のワインに比べてアルコールの含有量は非常に少ないと言いますが、でも、そうして飲んでいるので酔っぱらっている連中がいたのです。その状態で彼らは聖餐式に着こうとしていたのです。そのような状態で主の犠牲を感謝しようとしていたのです。ですから、パウロは大変厳しく責めるのです。22節「飲食のためなら、自分の家があるでしょう。」と。もし、ただ飲食を目的として集まるのならどうして自分の家でやらないのか？と。この人たちの問題は、主の晩餐の目的とその意義を無視していたことです。自分たちは何のために集まるのか、その目的を全く無視していたのです。

(2) 誤った教会観 22 b 節

それだけでなく、彼らは教会観においても間違っていました。主の晩餐が分かっていただけでなく、教会がどういうものかも分かっていたのです。22節の後半「それとも、あなたがたは、神の教会を軽んじ、貧しい人たちははずかしめたいのですか。私はあなたがたに何と言ったらよいでしょう。ほめるべきでしょうか。このことに関しては、ほめるわけにはいきません。」とパウロは彼らを責めるのですが、彼らのうちにある二つの問題を指摘します。

・**神の教会を軽んじる** : この「軽んじる」ということばは「ひどく嫌う、軽蔑する、侮る」という意味です。パウロは「あなたがたは自分たちのやっていることが何か分かっているか？あなたがたは利己的に行動することによって教会の中にこういった分裂を生み出してしまっている。そのような分裂を生み出すことが、本当に主の前に喜ばれることだとあなたがたは思っているのか？そのようなことが神の栄光を現すことなのか？」と彼らに問いかけるのです。

同時にパウロは、これはまさに神の栄光を汚すことだと言い「それは神の教会に対する罪なのだ」と指摘するのです。本来なら、主の栄光を現すところが全くそうでないことを指摘したのです。神の教会をあなたは侮るのかと。

・**貧しい人たちを恥ずかしめる** : 恐らく、食べ物が豊富にある人たちはいっしょに集まっているときに、そうでない人がいたら、これは間違っているのですが、ある種の優越感を得たかもしれません。「こちらのグループで良かった。食べ物もあるし、楽しいし…、あちらでなくてよかった。」と、そのような間違った優越感、罪を抱く機会を提供することにならないだろうか？また、食べ物がなく空腹でいる人たちの間に、もしかすると、自分たちのことを見て自らに恥辱や屈辱をもたらすことになっていないだろうか？自分たちの現状を見てそれを恥じているような人です。だからパウロは言うのです。「兄弟たちにそんな悲しみをもたらすことが神に喜ばれることなのか？あなたがたはそんなことをしたいの

か？」とそのことを問い掛けるのです。

ですからパウロは「あなたがたのしていることは兄弟姉妹への罪だ。本来なら、教会というのはそれぞれの信仰を高め合って成長する教化の場所なのに、あなたがたのやっていることはそれとは全く反対のことだ。」と言っているのです。

皆さん、悲しいことに、このコリント教会が陥ってしまっていたことは、教会が社交場になっているということです。教会の世俗化です。この世の影響を受け始めてだんだん教会がこの世的なものになっていってしまうのです。世的な考えや関心はその教会に集うクリスチャンたちの心を支配し、それが周りのクリスチャンたちに、そして、教会全体へと浸透していくのです。そのような考えが拡散していくのです。だからパウロは、もうすでに「あなたがたの中に本当の信者が明らかにされるためには分派が起こるのもやむを得ない」と語ったのですが、実際に、教会の中にはこのような分派をもたらす人たちが存在していたのです。悲劇です。

◎教会に「分裂をもたらす人」の存在

実は、パウロはそのことをローマ書の中でも教えています。ローマ16:17「兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまずきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。」、つまり、教会の中にある人たちが入り込んで来て、彼らは意図的に教会の中に分裂をもたらそうとするわけです。どういう人たちかと言うと「救いに与っていない人たち」です。彼らは教会の中でいろんな人に影響を及ぼして、そして、神の前に正しくない道を選択するようにと働くのです。「つまずきを」と書かれています。つまずきを引き起こすのです。「つまずき」、これは「その人に罪を起こさせる」ものです。自分たちが罪の中を生活しているゆえに、自分たちが誘惑をしてその信仰者までも罪に陥るようにと働くのです。このような人たちが教会の中に入り込んで来る。だからパウロは「遠ざかりなさい。そういう人から離れなさい。近づいてはいけません。」と言います。

テトス3:10、11には「:10 分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい。:11 このような人は、あなたも知っているとおりに、墮落しており、自分で悪いと知りながら罪を犯しているのです。」と書かれています。まとめるとこういうことです。このコリントの教会の中に残念ながらどのような影響によってそうなってしまったのかは分かりませんが、少なくとも世俗化して来たのです。彼らの関心は神のことではなかったのです。彼らは「主の晩餐」を食していなかった。ただの食事会に過ぎなかった。そして、その群れが分裂してしまっていました。教会の中にそのような分裂をもたらす人が入り込んで来たからです。それなら、そういう人をあなたたちは警戒しなさい。そのようなものに惑わされてはならないと言うのです。

その上で皆さんに知っていただきたいことを話します。「教会とは何か？」ということです。パウロが教えたいことはこのコリントの教会に、残念ながら、主のみこころから外れてしまったこの教会に、では「教会とは何か？」ということをお教えるのです。それは私たちにとっても大切なことです。なぜ、私たちはこの救いに与ったのか？なぜ、私たちはこうして集まっているのか？ということです。

☆「教会とは？」 使徒2:42、46-47a節

最初に見たように、使徒の働き2章に戻ってください。ここを見る時に教会が誕生したとき、この初代教会がどのように過ごしていたのか、そのことを見ることができます。使徒2:41-42「:41 そこで、彼のこばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。:42 そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」、2:46-47a「:46 そして毎日、心をつにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともし、:47 神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。」、この箇所が教えている初代教会の特徴は…

1) 主の真理を学び、祈りをささげていた

「彼らは使徒たちの教えを堅く守り、」と、彼らは教えられたその真理から離れようとしなかった。また、彼らは集まるたびに神の真理を学びたかった。なぜなら、彼らは神を知りたかったのです。彼らがだれかから言われてそういう思いを持たなければいけないとなって、そして、持ったのか？そうではありません。救いに与った人たちの特徴は「神のみことばに対する渇き」があることです。救いに与った私たちは新しく生まれ変わります。神の子どもとされた私たちはその神を知りたいのです。だから、みことばを聞きたいし、みことばを通して神のことをもっと知りたいと思うのです。こういう「渇き」というものを神は私たちにくださったのです。先ほど、私たちはそのような証を聞きました（本日10時からのバプテスマ式での証を通して）。

神によって救われた者たちのうちに神が何を与えてくださるのか？それは「神の真理に対する渇き」です。神を知りたい！ということです。まさに、初代教会を見る時にそのような思いをもって彼らが集まっていたことが分かります。

2) 主の十字架を覚えて感謝していた

42節に「交わりをし、パンを裂き、」とあります。46節にも「そして毎日、心をつにして宮に集まり、家でパンを裂き、」と書かれています。これは「パンを食べていた」ということではなく、「聖餐式」を行っていたということです。そして、彼らは宮に集まり家にも集まったのです。どのような順番で集まったのか、そこまでは書かれていませんが、少なくとも、みことばが教えていることは、毎日宮に行って、そこで主の十字架を覚えて感謝をささげているし、また、信者の家を周ってお互いがその場において神のすばらしさを覚え、十字架を覚え、救いを覚えて感謝していたということです。これが初代教会、生まれだての教会の姿だったのです。

3) 救われた者たちが主を称えていた

先ほども見たように、神の恵みを覚えて、そして、救われたことを喜びながら神に感謝をささげたと…。47節にあるように彼らは「神を賛美していた」のです。彼らが神に感謝していたことはたくさんありますが、その中の一つは「永遠のいのちが与えられたこと」を感謝するのです。死の問題については私たちは完全にピリオドを打ったのです。イエスを信じた人は「死んでからどうなるか？」と、そんな心配はしません。私たちは死んでも生きるのです、主とともに！私はどこに行くのか知っています。イエス・キリストの復活によってそのことが明らかにされたのです。この方は救い主なのです。この方は言われたことをその通りに為さる神なのです。イエス・キリストを信じた私たちには永遠のいのちが与えられました。私たちはそこに行く日を待っているのです。今日かもしれない、明日かもしれない、1年先かも？いつか分かりません。でも、確実なことは、死んだらそこに行くのです。その確信を皆さん持っていますか？

もし持っているなら、少なくとも、そのことを私たちは神に感謝しませんか！「神さま、永遠のいのちをくださってありがとうございます。私は今日死んでもどこに行くか分かっています。だれと永遠を過ごすのか分かっています。こんな祝福に私を招いてくださったことに感謝します。」と。天国に行けるといえるのは気休めではないのです。天国にいけるといえることを確信をもって私たちは受け入れることができるのです。先ほども話したように、そのすべてを可能にしたのはイエス・キリストのあの死からの復活です。イエスは生きておられます。それゆえに、私たちは死んでも生きるという確信が与えられているのです。

この後、弟子たちは大変な迫害を経験していくわけですが、でも、その迫害の中で彼らを支えたのは「私は死んでも生きる」ということです。行くところは決まっているのです。そして、感謝なことに、地上でいつまで留まるのか？それも神はご存じです。一番良い時に神は私たちをご自身のもとに召してくださいます。永遠について解決を得たのです。少なくとも、私たちは神の前に感謝できませんか！

ですから、この初代教会を見たときに言えることは、この教会はみことばに対しての渇きをもっていた、神を知りたいから神の真理をもっと学びたいと思っていたことです。そして、彼らはともに集まるときにその神を心から称えるだけでなく、神の前にとりなしの祈りをささげていました。賛美に溢れる、感謝に溢れる教会。希望に溢れていたのです。今話しているのは教会としてのグループだけではなく、そのグループを構成している個人の信仰者のことです。

どうですか？あなたは救いに与ったときにもっていた神に対する渇き、神をもっと知りたい、みことばの真理を学びたいという、そのような渇きが今もあなたのうちにあってそれがあなたを押し出していますか？それとももう十分学んで来たからそれで十分ですと、学ぶことに対する関心を失っていませんか？祈ることに関して、毎日食事の前に祈っているからそれでいいと、神と個人的に交われるのにそれについての喜びがないと。神は私たちの罪を赦してくださったから、その十字架を覚えながら神を誇りながら神を感謝しますか？それとも「ああ、クリスマスにときにそうしたから、それでいい。」としていませんか？私は死んでも生きるのだと、永遠のいのちをいただいたことを本当に喜び感謝しながら生きているのかどうか？どうですか、皆さん、あなたの信仰はどうでしょう？そのことを私たちは自らに問い掛けなければいけないのです。

この後、残念ながらすべてを見ることはできませんが、パウロが聖餐式について教えていくことを見ていきます。何をすべきなのか？これは私たち自身の自らの信仰を吟味する機会なのです。あなたの信仰は大丈夫か？救いに与っているのかどうか？救いに与っているなら、この質問をあなた自身にすることは愚問です。なぜなら、問題は解決したからです。いつまでもその質問を問い掛けることは、神の前に正しいことではありません。神のみことばを疑っていることとなります。

私たちの信仰は神が言われたことを信じるのです。イエス・キリストの救いをいただいたのならもう「救われた」のです。永遠に救われたのです。その喜びをもってその確信を持って歩んでいるかどうかです。教会とは「神の目的のために神が選び出してくださった人たちの集まり」なのです。神が神の目的のためにあなたを名指して呼んでくださったのです。罪の深みの中にいるあなたを、のろいの中にいるあなたを神は名前を呼んでそこから呼び出してくださいました。それが私たち信仰者、クリスチャンなので

す。そのクリスチャンが集まっているのがこの群れなのです。それでいて私たちが今見て来たように、もし、初代教会と信仰において異なっているなら、私たちはもう一度落ちたところに戻らなければいけません。どこからこうなってしまったのか？と、悔い改めて主がお喜びになる歩みを始めていくことです。

この初代教会の特徴を思い出していただきたいのですが、彼らは「心を一つにして宮に集まり」とあります。神がこの教会を、つまり、救われた者たちを集められた、名指しで呼び出された、その人たちが集まったときそこには「一致」があったのです。彼らはみな神を喜んでいたので、神に感謝していたのです。神の真理を知りたいと思っていたのです。自分のことではなくて人々のことを考えます。だから、人々のためにとりなしをしましょう。

この一致していた教会、サタンはそれを放っておきません。だから、様々な形でその中に分裂をもたらしていくのです。悲しいことに、コリントもそのような教会になってしまったのです。よく考えてみると、私たちはコリント教会をさばくことができるかどうかです。主は私たちの教会を何と評価されるでしょうか？パウロがもし私たちに手紙を送ってくれるとするなら、そこにはどんなことが記されているのかです。

そこでパウロは22節の後半で「私はあなたがたに何と言ったらよいでしょう。ほめるべきでしょうか。このことに関しては、ほめるわけにはいきません。」とこのように言った後、今度は「聖餐式」について「主の晩餐」について教えていきます。

B. 聖餐式の意義 23-25節

1. 聖餐式についての説明 23-25節

23-25節「:23 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、:24 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」:25 夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」、イエスは弟子たちと食事をされました。一般的にこれは「最後の晩餐」と呼ばれているものです。

1) パンについての説明 23、24節

ルカ22:7、8には「:7 さて、過越の小羊のほふられる、種なしパンの日が来た。:8 イエスは、こう言ってペテロとヨハネを遣わされた。「わたしたちの過越の食事ができるように、準備をしに行きなさい。」と書かれています。「種なしパンの日」とは当然「出エジプト」を記念するのですが、それは一週間行われますが、過越の祭りはその中で一日だけ行われるユダヤの三大祭りの一つです。同じように、エジプトから解放されたことを記念したのです。

ここに書かれている出来事はその「過越の祭り」の食事のときになされたことです。このときに初めて為されたものではありません。人々はずっとそのように過越の祭りを祝い続けていたのです。見ていただくと23節の初めに「私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。」と、パウロがイエスから直接教えを聞いたように記していますが、パウロが言っていることは、これは主が言われていることそのものだ。でも、この教えは私が実際に聞いたのではなく、エルサレムの教会の人たちから教えられた。なぜなら、23節に「渡される夜」とあり、これはイエスが捕えられるその夜のことで、最後の晩餐を終えた後弟子たちはイエスとともにゲッセマネの園に行き、イエスはそこで捕えられたのです。

パウロはこの最後の晩餐に参加していません。そこには弟子たちがいたのです。彼らからここでイエスが教えられたことをパウロは聞いているのです。そして、そのことをパウロは記したのです。

23節の続きから「主イエスは、渡される夜、パンを取り、:24 感謝をささげて後、それを裂き、」とあります。これは何も目新しいことをしたわけではありません。一般的にみな同じことを行ったのです。この「過越の食事」のときに特徴的なものは「四つの杯」です。彼らは4回ワインを飲んだのです。

・**第一の杯** : 彼らが集まった時、主人がまず祝福して「第一の杯」を集まった人々に回すのです。みなそれぞれから飲みます。その後、苦菜を食べます。あくまでそれは奴隷であったときのことを思い出すためです。そして、過越の説明をします。

・**第二の杯** : その後に「第二の杯」を飲みます。その後、「種なしパン」を裂いて配って食事をします。この種なしパンを裂いたときのことがここに書かれています。「主イエスは、渡される夜、パンを取り、:24 感謝をささげて後、それを裂き、」、第二の杯のときです。これをした後、食事をします。いけにえの羊をみなで食べるのです。

・**第三の杯** : 食事が終わると祈りをして「第三の杯」をみなに配ります。そして、賛美をささげるのです。

・**第四の杯** : 最後に別れる前に「第四の杯」をみなで飲むのです。

ですから、普通の過越の食事をしたのです。ところがこのときは違うところがあったのです。24節

「感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。」と、通常ではここで主人は「出エジプト」のことを語ってみながそのことを思い出すのです。ところがイエスは「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」と言われました。この教えを弟子たちは聞いたことがありませんでした。「イエスさまは何を言われたのか？」と。

☆パンと杯についてのイエスの教え

(1) パンについての説明 : イエスは「これからあなたがたに配るこのパンは、わたしのからだの象徴なのだ。」と言われたのです。創造主なる神が人となり、あなたへの御怒りのすべてをあなたに代わって十字架で受けること、あなたの創造主なる神が、神に逆らい続けているあなたを救うためにご自分のいのちを犠牲にしてくださる。「わたしがこれからしようとしているそのことの象徴がこのパンだ」とイエスは言われたのです。それを聞いた弟子たちはびっくりしたでしょう。「イエスさまはいったい何のことを言われているのか？」と。過越の祭りでは、あのエジプトでの出来事、そして、その後約束の地に導かれていく、そのことを思い出して神に感謝するのです。でも、イエスはそうではなかった。

(2) 杯についての説明 : 杯も同じだったのです。簡単に言います。25節「夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」と。夕食の終わった後ですから、これは「第三の杯」のときでしょう。

恐らく、祈りをささげた後、杯を配る前にイエスはこの杯の教えをされるのです。本来なら、エジプトを出て行く前に門柱とかもいに血を塗ることによって、その家の初子は家畜に至るまで殺されなかった、その話をするのです。ところが、イエスは「この杯は、わたしの血による新しい契約です。」と言われました。イエスが言われたことは「この杯は神の小羊の血を象徴する」ということです。神の小羊であるイエスの血、つまり、あなたの創造主なる神があなたを救うためにご自分のいのちを犠牲にしてくださった。この杯は「ささげられる主イエス・キリストご自身のいのちの象徴だ」と言ったのです。

ですから、このときから主のことを知らないユダヤ人たちは今もこの「過越の祭り」をお祝いするのです。でも、私たち信仰者はこのイスラエルの民がエジプトから脱出したことを祝うのではありません。奴隷だった彼らが解放されたことを祝うのではありません。罪の奴隷だった私たちが、そこからキリストによって解放されたことを祝うのです。罪の奴隷であったあなたが、永遠ののろいの中にいて永遠の地獄に向かっていたあなたが、主イエス・キリストによってそこから救い出されたこと、そのことを感謝してその方を心から誉め称えるのです。これが聖餐式なのです。悲しいことに、コリント教会の人たちはそれをしていなかったのです。

最後に皆さん、今日はもう終わらなければなりません、私たちに必要なことは自分の信仰の吟味をすることです。何度も皆さんに話したように、救われていると思いつつ実はそうではなかった、こんな悲劇はないです。だから、自分自身の信仰が本物かどうか、その確認をしなければいけない。簡単ですよ、皆さん。自分に問いかけたらいいのです。「私は今日死んでも確実に天国に行けるのか？」と、そのことを考えればいいのです。もし、不安ならみことばに立つことです。みことばこそ私たちが神からいただいた神のメッセージですから。みことばが分からなかったら信仰者に尋ねたらいいのです。そして、解決することです。「今日、私は死んでも確実に天国に行ける！」と。そのことが解決すればこのすばらしい祝福をくださった神をいつも覚えてこの方を称えながら生きることです。

どうか、そのような歩みをもって、主があなたに与えてくださった祝福を喜び、感謝する者になってください。このすばらしい主を誇る者としてこの一週間も歩んでください。思いませんか？皆さん、だれ一人として自分を誉めることはできません。なぜなら、私たちは何もして来なかったからです。私たちがして来たことは神に逆らい続けることでした。神なんです！こんな私たちに救ってくださったのは…。だから、私たちはこの方を誉め称えながら歩いていくのです。この方の言われたことを神の助けをいただきながら行っていくのです。それがあなたや私のこの方に対する感謝だからです。

どうか、そのように歩み続けていきましょう。